

第4回京都市総合計画審議会における主な意見

＜「これからの25年、大切にしたい思想・価値観（京都市未来共創チーム会議）」に関する御意見

※当該資料内容を基に御発言されたものも含む＞

宗田会長

- 京都が世界のために何ができるかを議論したい。刹那的な、時代ごとにあった形に変貌していく、イノベートしていくものであるべき。その意味で、未来共創チームの提言はその思想にたっているのは明らか。長期ビジョンで生かせると思う。
- 余白の思想は、“marginal”、欄外、余白に取り残されてしまったという意味もある。余白という言葉は、いくつかの面を持っていて、余白がないといけないというが、未来共創チーム会議の意見にもあったとおり、余白を残したけれど、余白に取り残された人がいることもある。なので、気を付けないといけない。
- 若者の力や高齢者の知恵、知識をどう生かせるか。そういう部分が、未来共創チームの意見の4点目の「誰もが「育む・支える」まなざし」というところに出ている。我々の態度、哲学の根底にあるべきだと感じた。

安保副会長

- 1点目の「弱いつながりもデザインした「0.1市民」を数多く作っていく」について、人だけではなく動植物や機械も対象にするというのは、いろんなところに通じるもの。もともとの観念が狭かったところが広がっていくというのが通常の歴史の歩みなので、その歩みの一つかと思う。
- 1点目の「0.1市民」。0.1の権利を与え、主体として認めていこうということ。権利を与えることは、義務も生じることにつながり、すごく大変。守らないといけない、様々なところに手当をしていかないとけないことになる。
- 3点目の「ベストではなくベター」ということは、どうしても一定の年齢になると、そう言って良いのだろうか、と思ってしまうのだが、若い世代は、そうじゃないと京都らしさや市民が幸せで生きていけないという価値判断があるのか、というところにすごさを感じた。
- 4点目の「ケア」については、高齢者もどんどん増えていくので、高齢者にも必要。お互いに力のある人だけでなく、全ての方々が京都で暮らしを確立していくには、ケアの思想をいつも持っていないと厳しいことがよく分かった。

曾我副会長

- 異論を言うことになるかもしれないが、「市民0.1」はいいが、現に市民が何を考えているのかに目を向けたい。すると、まず経済ですと答えている。市民0.1の権利の話が出ているが、税金を負担してくださっているのは今ここに住んでいる方々。その方々が経済だと言っているのに、脱経済と言うのは、果たして届くのかなとは思う。対立はあっていい。市民の皆さんは経済だとおっしゃるが、脱経済だと投げかけてもいい。ただ、そっちの方だけに向いていると捉えられてしまうのはよろしくない。

- 脱成長・脱競争といっても、京都だけで済む話ではないし、周りが成長していくと相対的に貧しくなってしまう。すでに円安で物価が上がっていることで、しんどくなっているし、我々はこのままでいいと言っている、世界は成長していき、周りはどんどん給料は上がっていくというときに、我々の給料がそのままでは生活はしんどくなる。経済以外、成長以外もあるというのは全然いいが、経済否定みたいにならないようにする方がいいと思う。
- 市民以外も見てもいいが、そこには利害対立はある。外からどんどんと来られて市民は困っている、ここをどういう対話をして、どう話をつけるのかということまでいかないといけない。
- 現時点でこうだと決めつけずに、今後もずっと決めていく、対話していくという仕組みをどう作るのかが大事。審議会のような形で選ばれた人たちではなくて、いろんな人が入って考えていくミニパブリックスのような場を設けていくのかということとセットで、オープンにして今後も考えていく。そこには対立もあるし、共通部分もある中で、どう方向性を見出していくかという仕組みが必要になってくるので、その辺りの話がもう少し入ってくるといい。

赤松委員

- 未来共創チーム会議から、スタートをデザインするという意見があった。大学のまち、芸術、創造的、クリエイティブをめざす人々を育てる、つまり、はっきりした出口が見えないことを学問として取り組もうとする人材を豊かに生み出すことに関わり、つながる部分である。

小川委員

- 未来共創チーム会議の話を聞いて、ある種のハイコンテクス性や曖昧性、空気感をもっと全面的に再評価していくことで、様々なことが突破できるのではと強く感じた。というのも、自分の主体性をぶつけ合い、激しく意見を言い合うコミュニケーションが成功しているかということ、新たな争いを生んでおり、必ずしもそうでもない。
- 余白や間など、相手からの働きかけを呼び込むことや、新しいものを受け入れる隙間を持ちながら、察するコミュニケーションが新しい未来を拓く可能性なのではないか。

榎田委員

- 未来共創チーム会議の意見を聞いて、2つ感じたことがある。
1つは都市の魅力という観点について、未来共創チーム会議の皆さんの関心事は、従来の都市計画で言われる、どこにどう住空間や商業空間を作るのかというように、まちの発展に向けたハード面の整備が従来型の都市計画のステレオタイプだとすると、そういった文面はほぼどこにも出てこない。逆に、人と人との関係性、社会的な弱い紐帯に絡んで、コミュニティを作っていくということに対して、きちんととままり切れていないが、紐帯と余白とウェルビーイング、支える、長期目線という5つの表現の中で、これからは人と人との共感を通じたコミュニケーションからなる、良質なコミュニティをどうやって作っていくかということが強調されていたと感じた。従来ではなくデジタルも使って弱い紐帯でつながる社会、そこにネットワークを作る。ここに関して、もう少し具体的に話を進めていかないと、そこで話が終わってしまうリスクがある。
- もう一つは、自分事、自分のまちとして感じるにはどうすればいいか。任せられて初めて責任感が生まれる。今の京都のまちづくりの問題の一つは、任せられてないから自分のまちだという責任感や

義務感がないということ。その矛盾が若干あるのではないか。いかにして自分事にしていくか、自分のまちだということを、かなり多くの層で感じるような仕掛けを作るには、具体的なことを言っていないとこれも概念論で終わってしまう。

- すべて行政でやってしまうのではなく、市民の方が半分ボランティア、半分ワークという形で、まちづくりに参加する。そういったことをもっともってやっていったら、「0.1市民」という言葉、すべてのひとが市民意識を持つということが、まちづくりにつながっていくきっかけになるのではと思う。

阪部委員

- 1点目の「弱いつながりもデザインした「0.1市民」を数多く作っていく」というところについて感じた点は、大学が京都だったとか、仕事で京都に関わっていたとか、そういった人たちも巻き込んで、自分事として何らかの形で関わりを作っていけるということはすごくいいと思った。それが他にはない京都らしさにつながると思う。
- 4点目の「誰もが“育み・支える”まなざしを持つ」については、マイノリティのような人の視点が必要であるという視点を改めて大事にするということで、多くの方が主体的に関われるベースになる長期ビジョンを作っていけるのではと感じている。

鈴鹿委員

- 一人一人、自分サイズの幸せと1000年先を見ることは、一見すると相反するように見えるが、自分たちの幸せを追求していくことが、結果的に1000年先につながると思う。未来共創チーム会議の意見にもあったように、地図を描くのではなくコンパスを標すということはそういうことではないか。
- 来年どうしようとか、25年先をどうしようではなく、1000年先にこうしたいから、その中で柔軟な部分、余白を作るのが大事だと感じていた。それを言い表せる言葉がなかなか見当たらないが、キーワードになるのではないか。
- 「0.1市民」の考え、京都を愛する人も京都に意見を言ってくださいということを、長期ビジョンに盛り込むことが、大前提として必要なのではないのか。京都市としては皆さん全員を受け入れていることを大前提として書いた方が、「そうなのだ。」と、そこから自分事になるのではと思う。

高屋委員

- 未来共創チーム会議の意見は非常に参考になる。特に私に関係するところ、4点目の「誰もが“育む・支える”まなざしを持つ」については、福祉の関係を重視しているので、この考え方に意見いただいているのはありがたい。我々も会合で集まった時に、こういう考えがあるということは話をしていきたい。

貫名委員

- 未来共創チーム会議での議論と審議会の議論が今までリンクしていなかった、というのは一委員として体感している。それぞれの概念は非常に理解するが、骨子案とどのように結びつき、ビジョンとどう組み合わせるのが大事なところ

濱崎委員

- 未来共創チーム会議の意見において、「実感できる」という言葉があった。「網の目の一部としてあるという事実に感じられたり、可視化できたり」、「自分の役割を理解する」、「小規模で実験的なプロジェクトが自然発生する環境」があるという具体的な点、コンパスという話も面白い。これらは、嗅覚を磨くという、より身体的な話である。それを最終的に言葉に落とすにはどのようにすれば良いかヒントになる。
- P 1 3に「必要なタイミングで重要な参照点を見いだせるかどうかという点にはテクニックが必要だ」とある。すごく大事なこと。例えば、なぜその環境が取り壊され、評価されなくなっているのか。今までは、自分で解釈することができたが、気づくためのタイミングやきっかけを作ることが必要な時代だと改めて考えさせられた。
- 余白とは何かと考えると、余白を感じられるかどうかではないかと思う。点があるから余白を感じられる、真っ白だと感じられないのであって、なぜそれを感じられなくなったのかというところから、この数十年のまちづくりや京都を考えて、解釈できる、自由だということに至れるのか、そういう方向で考えてみてもいいかと感じた。

原委員

- 未来共創チーム会議の資料を読み、感銘を受けた。我々の上の方々が京都や日本を作り上げてきた。これを、これからの世代の若者との接着剂的な役割を担うのだと考えている。では、次世代に向けてどう発信するか。京都に住んで、来て、働いて良かったと、全ての方が良かったと思うには、心に余裕を持ていただくことが必要。

福富委員

- 3点目の「脱成長・脱競争の社会へ。」というところを描ければ、高齢化については、日本は世界の最先端を行っているので、それを世界に示していけるものになる。
- 4点目の「誰もが“育む・支える”まなざしを持つ」について。我々、福祉の立場からすると、支えがないから弱く追い込まれてしまうと感じている。支えがないという状況は、支えるシステムがない、人との関係性がないから生まれてくる。その時に、「余白」、「遊び」も同じことを指すのかもしれないが、ある状況では排除されている人が、ある状況の中ではそれなりにつながっていたりするということがある。そういう多様なつながりがあると、排除を少なくできるかもしれない。
- 弱い立場にいるように見えて、実は弱くない、強さを持っているという両面があると思う。また、弱い立場に追い込まれても、そこから立ち直っていけるレジリエンスみたいなものを生み出していくのが、余白なのかもしれない。
- 余白の中に“marginal（周辺）”という意味もあって、そういう捉え方もできるなと思う。その反面、周辺に立ってみて初めて仕組みのゆがみが見えてくることもある。いろいろな人どうしのいろいろな関わりがある。

藤野委員

- 未来共創チーム会議の意見に共感した。未来共創チーム会議から、「0. 1 市民」という新しい言葉が出てきた。より先を見据えるのであれば、骨子案にこうした新しい言葉を取り入れられないか。

新しい言葉を使うと、共有が難しくなるリスクもあるが、何かが伝えられた時、新たな認識が社会に生まれ、未来の構築にもつながっていくのではないか。

プラー委員

- 共感したのは、3点目の「脱成長・脱競争社会へ。ベストだけでなくベターも認める」。私が来日したのはバブルが崩壊した頃。それまでずっと頑張って、経済的にも発展してきた日本だったが、そういうことではない、ベストだけでなくベターを認めることが、これからの日本社会にとっても重要。

松井委員

- 委員の皆さんがおっしゃるように、また未来共創チーム会議の意見にあるように、京都のひとの在り方、これから25年間、その先もそうだが、京都のまちを作っていくとか、災害を乗り越えていくひとの在り方を、みんなで考えるのがいいと思う。
- 未来共創チーム会議の意見を読ませてもらって、私の心には「しなやかさ」とか、「人の強さ」、「生きる強さ」とか、「包容力」という言葉が浮かんできた。いろんなことを乗り越えていく、守っていくために必要なことだと感じた。

野村特別委員

- 京都を担う主体としての若者の責任感や義務感について、どのような議論が未来共創チーム会議であったのか伺いたい。というのも、資料の2ページ目にあるように、もともとの問いが「未来共創チーム会議メンバーが大切にしている・共鳴する価値観はなにか？」であるため、このようなまとめ方は納得する一方で、その価値観を守っていくのは、私を含めたそれ以降の世代であると理解している。どのような議論のトーンで、京都の未来を担っていきたいという議論であったのか。また、責任感や義務感、主体性が緩やかなもので、あまり明示されなかったのであるならそれもひとつの示唆である。つまり、曖昧さやハイコンテクスト性、文脈依存性、共同体の空気感に基づいて肩ひじ張らずに、ということは、市長の御示唆にもあるように、近代合理主義的なゴールがあり、このように進むのではない都市の空気感や姿勢を反映したものであり得る。